

二〇一五年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

第3問 古文 『夢の通ひ路物語』

〔出典〕

『夢の通ひ路物語』は、中世（鎌倉時代～室町時代）に成立した擬古物語。作者は不詳。作品冒頭、吉野に住む阿闍梨（高僧）の夢に、亡き権大納言（問題文中の男君）が現れ、三の宮（問題文中の御子）に見せてほしいと言って巻物を託す。目が覚めると、巻物は現実にそこにあり、読むと、権大納言と梅壺女御（問題文中の女君）の恋の物語が書かれていた。作品は、阿闍梨が巻物を読み進めることで、読者も一緒に巻物の物語を読むことになるという構造になっている。巻物に書かれた物語は、三の宮出生の後、権大納言が苦悶のうちに病死し、女御が吉野の聖を導師として出家して終わっており、阿闍梨は、三の宮が成長した後にこの巻物を渡して出生の秘密を知らせる。問題の本文は、女君が女御となり、三の宮が生まれ、男君・女君が互いに恋しく思いつつ苦悩している場面である。

近年の、センター試験の古文の問題は、平安時代の物語・鎌倉・室町時代の擬古物語・江戸時代の仮名草子など小説類からの出題が多く、擬古物語の出題は、二〇一三年『松陰中納言物語』・二〇一〇年『恋路ゆかしき大将』・二〇〇九年『一本菊』・二〇〇七年『兵部卿宮物語』などがある。

〔通釈〕

（男君と女君は）互いに恋しく思いをお寄せになることが様々であるけれど、（男君は）夢以外では決して（帝の女御となった女君のもとへ）通って行くことのできる身ではないので、現実には（逢うことの）期待も断たれてしまったつらさばかりを思い続けなざり、大空だけを（むなしく）ぼんやりと眺めながら、なんとなく心細く思い続けなざっていた。男君のお気持ちとしては、まして恨めしく、（女君への）どうにもならない（恋の）苦悩に加えて、御子のご様子についてもたいそう畏れ多いことだが、鏡に映った（自分自身の）顔も（御子の顔に）そっくりなので、ますます「（御子が我が子であるという真実を）はつきりさせたい」と思い続けなざるけれど、（近頃は）以前のように（女君ばかりか）相談相手となる人「女君の侍女の右近」までも連絡を申し上げることがないので（確かめようもなく）、「（皇子が自分の子であることを明らかにすることで）みつともなく、今さら関わりあって、（女君の）心を乱し愚かな奴だと思われはしないだろうか」と自然と気がねされて、（ご自分の従者である）清さだにさえもお心を許しておっしゃりもせず、ますます

すひどく物思いをなさるのであった。

こちら「女君のほう」でもお心では絶えずお嘆きになるけれど、どうして（わずかでもそのような）気持ちをお漏らしになることがあるのか。帝の寝所にたびたび召され、自然と帝のお側にいることが多くなって、帝のご愛情がこの上なく深くなっていくのも、（女君は）とてもつらく、恐ろしく、人知れず苦しくお思ひになって、（ある時）少しの間（ご自分の）お部屋にお戻りになっていた。人も少なく、もの静かにほんやりと物思ひにふけていらっしやった夕暮れに、右近が、お側に参上して、（女君の）御髪（おぐし）などをとかし申し上げる折に、例の（男君に関する）事をそれとなくお話し申し上げる。

（右近が）「近ごろ（男君を）拝見いたしましたところ、（男君の）ご両親がご心配なさるのもごもっともでございます。本当にげっそりとお痩せになり、これ以上ないというほどお顔色が真っ青だと拝見いたしました。清さだも、（男君のもとへは）久しく無沙汰をしておりましたが、（男君は）どのような（女君とのことを）あきらめなさったのだろうか、何日も気がかりに思い、恐ろしく思われましたが、やはり（男君は）辛抱しきれなくていらっしやったのでしょうか（女君へのお手紙を清さだに託しなさいました）、（清さだが）昨日手紙をよこした中に、このようなことが書かれておりました。『本当に、（男君が）お悩みになり衰弱なさることは、日を経て言う甲斐もないほどひどく、拝見するのも気の毒で。東宮「皇太子。すでに亡くなっている別の女御を母とする皇子」がたいそうかわいらしくまとわりつきなさるので、気を緩めて（部屋に）籠もりなさることもなかったのですが、この頃は、続けて内なさることもおできにならず、ひたすら深くお悩みになり衰弱なさっている』と書いてございました」と言って、（男君の）お手紙を取り出したけれど、（女君は）かえってつらく、何となく恐ろしいので、

「どうして、このように言うのだろうか」

とお思ひになって、泣いてしまわれる。

（右近は）「男君のお手紙も）今回が、最後でございます。御覧にならないようなことは、罪深いことだとお思ひになるのがよい」と言って、泣いて、

「（お二人が）以前のままの状態であつたら、（どうして）このように思いがけないこととなり、どこに苦しいお気持ち加わることがございましたでしょうか」

と、こっそり申し上げるので、（女君は）ますます恥ずかしく、本当に悲しくて、（男君の手紙を）捨てることができずに御覧になる。

「さりととも…：そうはいっても（逢える機会もあるだろう）と期待していたが、その甲斐もなく（私は死ぬので）、私が死んだ後に、せめて並々でない物思ひだけでもしてください。

（あなたが入内して私の）手の届かない宮中にいるのを拝見し、（帝とあなたの前で御簾越しに）あのような笛の音を奏でました夕方から、気持ちも

乱れ、苦しく思っておりましたが、(死ぬ前に) 間もなく魂がこのつらい身を離れて、あなたのもとにさまよい出たなら、お引き留めくださいよ。惜しくもない命ですが、まだ死に果ててはいませんので」

などと、しみじみと、いつもよりもますます見所があるように(男君が) 思うままに書いていらっしやるのを御覧になると、(女君は) これまでのことや行く末のことについて何もかも(絶望して) 眼の前が真っ暗になって、(涙で) お袖をたいそう濡らしなされる。(女君が) 伏せていらっしやるのを、(右近は) 拝見するのも気の毒で、「(お二人は) どのようなこの世でのご宿縁であったのだろうか」と、思い嘆くようだ。

「人が来ないうちに、さあ、御返事を」と(右近が) 申し上げると、(女君は) お気持ちもせわしくて、

「思はずも…心ならずも離ればなれになってしまったことを嘆いて、あなたと一緒に(私もこの世から) 消え果ててしましましょう。死に遅れるつもりは(ありません)」

とだけ、お書きになるが、(手紙を) 結びなさることがおできになれなくて、深く思い悩んでひたすらお泣きになる。(右近は) 「(女君の手紙は) このよう言葉少なく、(二人の関係が改善することを示すような) 格別見るべき節もないとはいえ、(男君は) ますますしみじみと気の毒にも御覧になることだろう」と、お二人(のお気持ち) を思いやるにつけても、悲しく見申し上げた。

【解説】

問1 傍線部の解釈の問題 (ア) 標準 (イ) 基礎 (ウ) 基礎

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、それぞれ選べ。

重要単語・重要文法を確認し、前書きなどや前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 「あぢきなき嘆き」

「あぢきなき／嘆き」と単語分けされる。「あぢきなき」は、「不当だ・甲斐がない・無益だ・おもしろくない・情ない」等の意の形容詞「あぢきなし」の連体形。その点で、①「頼りない」・②「限りない」・③「押さえがたい」は正しくない。④の「どうにもならない」は、「悩んだところでもうにもならない」、つまり、「悩んでも甲斐がない」の意だと考えれば正しい。⑤の「ふがない」は意味が近そうだが、「あぢきなき」が「嘆き」に係っているのに対して、⑤の「ふがない」は「嘆き」に相当する「いらだち」ではなく、「自分自身」に係っているのであるから、正しくない。

よって、正解は④。また、少し前に「男の御心には」とあるから、「あぢきなき嘆き」は男君の嘆きを言っているのであるが、前書きの「その子を自分の子と確信する男君は人知れず苦惱」や、本文冒頭の一文「かたみに恋しう思し添ふ」によれば、男君が嘆いているのは女君とのこと、もしくは、御子のことであるから、その点から見ると②か④が正しいが、傍線部の直後に「に添へて、御子の御気配も」とあり、傍線部では御子に対する思いを言っていないことがわかるから、この点から見ても正解は④である。

(イ) 「あきらめてしがな」

「あきらめ／てしがな」と単語分けされる。「あきらめ」は、「明らかにする」の意の動詞「あきらむ」の連用形である。これが正しいのは②の「真実をはっきりさせ」だけである。よって、正解は②である。何を「はっきりさせたい」のかについては、直前に、「鏡の影もさをさ覚ゆれば（注1）」とあり、前書きの、「その子を自分の子と確信する」などから、御子が自分の子なのかどうかについて、ということがわかる。「あきらむ」を「諦める」の意だと考えて、①「辞めてしまい」・③「思いを断ち切り」を選ぶのは誤り。なお、「てしがな」は、「～したい」と訳す、自己の願望の終助詞で、正しいのは①・②・③。④・⑤の「～してほしい」は、終助詞「なむ」の訳し方で、「てしがな」の訳としては正しくない。

(ウ) 「御ころざしのになきさまになりまざる」

「御ころざし／の／になき／さま／になり／まざる」と単語分けされる。「ころざし」は、「心持ち」の意だが、「愛情」の意で使われることが多い。その点では、①「愛情」・②「寵愛」がよさそうであるが、③「気持ち」・④「気遣い」の可能性も残る。「になき」は、「二つとない・またとないほどだ・この上ない・すばらしい」の意の形容詞「二なし」の連体形。「またなし・たぐひなし・よになし」等と同義の語である。これが正しいのは、①の「この上なく」だけである。よって、①が正解。

正解 (ア) 21 ④ (イ) 22 ② (ウ) 23 ①

問2 敬語（種類と敬意の方向）の問題 標準

波線部 a ～ c の敬語の説明の組合せとして正しいものを選べ。

まず、敬語の種類を見る。

a 「侍り」は、本動詞として「あります・おります」と訳す場合と、補助動詞として「～です・～ます・～で～ございます」と訳す場合は、丁寧語であり、本動詞として「(高貴な人や場所に) お仕えする」と訳す場合は謙讓語である。a は形容動詞「むべなり」の連用形に付いていて、「むべに侍り」で「もつともでございます」と訳せるので、ここでは、丁寧の補助動詞。よって、a の敬語の種類が正しいのは、①・②・⑤である。これがわかるだけでも③・④は消去できる。

b・c は「給ふ」である。「給ふ」は、四段活用(給は／給ひ／給ふ／給へ／給へ)の場合は尊敬語で、本動詞として「下さる・お与えになる」、補助動詞として「お～になる・～なさる」と訳す。また、下二段活用(給へ／給へ／給へ／給へ／給へ)の場合は謙讓語で、補助動詞としてしか用いられず、「～です・～ます」と丁寧語のように訳す。b は「給は」の形であり、「籠らせ」「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形)に付いているので、尊敬の補助動詞。よって、b の敬語の種類は、全ての選択肢が正しい。c 「給へ」は、連用形に接続する助動詞「き」の連体形「し」が接続しており、「給へ」で連用形であることがわかるから、謙讓の補助動詞。よって、c の敬語の種類が正しいのは、①・③・⑤である。

以上のように、敬語の種類を見るだけで、選択肢は①と⑤に絞られる。
次に、敬意の方向を見る。

「誰から」については、その敬語を話している人からと考える。会話文であれば、その「会話文を話している人から」、地の文であれば、「作者(語り手)から」と考えるのである。

a の「侍り」は、会話文中にあり、その会話文は、直前に「右近、御側参りて聞こえ奉る」とあるとおり、右近の会話文であるから、「右近からの敬意ということになる。これについては、全ての選択肢が正しい。b の「給は」も、a と同じく右近の会話文にあるが、b はその会話文内の『』の部分にある。『』の前の「清さだも昨日文おこせし中に、かかるものなむ侍りける」が正しく読めれば、『』は清さだの手紙の引用であるところから、b は「清さだから」の敬意があることになる。よって、これを「御方々から」としている①・②・③は誤りである。また、c の「給へ」はAの手紙文中にあり、この手紙は問4の設問文で明らかにされているとおり、男君の手紙であるから、「男君から」の敬意であることになる。これについては、全ての選択肢が正しい。よって、この段階で、敬語の種類と、「誰から」の説明が正しい⑤が正解であることになる。

「誰へ」についても見ておこう。「誰へ」の敬意かは、問われている敬語の種類から判断し、尊敬語の場合は「動作の主体へ」、謙讓語の場合は「動作の受け手へ」、丁寧語の場合は「話の聞き手へ」と考える。

a は、丁寧語であるから、a を含む右近の会話文の聞き手である女君への敬意ということになる。これが正しいのは、①・②・⑤である。b は、尊敬語であるから、「籠らせ給はぬ」の主体である男君への敬意である。これは主体を読み取るのがやや難しいが、選択肢でこれが誤っているものは

ない。cは、謙譲語であるが、謙譲の「給ふ」は訳と敬意の方向は丁寧語同然に扱うので、「話の聞き手へ」の敬意ということになり、cを含む男君の手紙文の聞き手（読み手）である女君への敬意ということになる。謙譲の「給ふ」の敬意の方向は丁寧語同然に扱うべきだというのは、やや難しいが、これが誤っている選択肢はない。

aとcの敬語の種類から①と⑤に絞り、bがある『』が清さだの手紙文であって、bが清さだからの敬意であることがわかれば、正解は得られる。

なお、下二段活用の謙譲の「給ふ」が、センター試験で問われるのは珍しいが、「給ふ・奉る・参る」など二種にまたがる敬語に関する学習は重要であるから、しっかりと確認しておきたい。

正解 24 ⑤

問3 傍線部の心情説明の問題 標準

傍線部X「いとど恥づかしう、げに悲しくて」とあるが、このときの女君の心情の説明として最も適当なものを選ぶ。

選択肢は全て、女君の心情を「恥づかしくなり」「悲しく感じている」と説明しており、違うのは、女君に対する右近の言葉や態度の説明である。女君の心情説明問題のかたちをとってはいるが、実は、これは、「女君を恥づかしく悲しくさせた右近の言葉・態度で正しいのはどれか」という問題なのである。

第二段落以降、実際に登場しているのは女君と右近だけであり、女君の動作には尊敬語が使われ、右近の動作には尊敬語が使われていないから、傍線部Xの直前にある右近の言葉・態度は、傍線部Xの直前の、「『こたびは、とぢめにもく忍びても聞こゆれば』の部分である。ここは、『(男君のお手紙も)今回が、最後でございましょう。御覧にならないようなことは、罪深いことだと思いいなるのがよい』と言って、泣いて、『お二人が)以前のままの状態であったら、(どうして)このように思いがけないこととなり、どこに苦しいお気持ち加わることがございましたでしょうか』と、こっそり申し上げると」という意味である。よって、これを正しく踏まえて説明している③が正解である。

①は、「男君の病状が悪くなったのは自分のせいだと責められ」という事実が本文にない。②は、「世に秘めた二人の仲を詳しく知られて」「世に秘めた」「詳しく」からして、皇子の出生の秘密のことを言っていると考えられるが、右近が皇子の出生の秘密を知ったとは本文に書かれていない。「二人の仲が公にできないと思いい知らされて」も、判断の根拠がない。④は、男君の手紙を「罪深い」としているが、これが本文にない。また、

「男君の姿が元気だった頃とは一変した」ことは清さだの手紙によって知れるが、右近がそれを「心苦しいと嘆」いているとは書かれていない。⑤は、「子どもの面倒を見ないのは」も、「子どもさえなければ帝も男君もここまで苦しまなかつただろう」も、右近は言っていない。

正解 25 ③

問4 内容説明の問題 応用

本文中の手紙A（男君の手紙）、手紙B（女君の手紙）の内容の説明として最も適当なものを選べ。

男君の手紙Aにある和歌は、「そうはいつでも（逢える機会もあるだろう）と期待していたが、その甲斐もなく（私は死ぬので）、私が死んだ後に、せめて並々でない物思いだけでもしておくれ。」という意味であり、男君は続けて「（あなたが入内して私の）手の届かない宮中にいるのを拝見し、（帝とあなたの前で御簾越しに）あのような笛の音を奏でました夕方から、気持ちも乱れ、苦しく思っておりましたが、（死ぬ前に）間もなく魂がこのつらい身を離れて、あなたのもとにさまよい出たなら、お引き留めくださいよ。惜しくもない命ですが、まだ死に果ててはいませんので」と書いている。ポイントは、「私は死ぬだろうが、その前に魂があなたのもとにさまよい出たら」という点である。これを確認できれば、「（魂が）この身をにとどまって死にきれない」としている①、魂ではなく「私を受け入れてはくれないものか」といつている②、魂がさまよい出る時を「死ぬだろうが、そのときには」としている④、「死んだら」としている⑤は、いずれも誤りであり、「死ぬだろうが、それまでに」としている③が正解であるとわかる。

①は「生きる甲斐もなく」、②は「死にきれないので」、④は「誰のせいであつたのか悩んでほしい」、⑤は「空を眺めてほしい」「そばに置いてほしい」の部分にもキズがある。

女君の手紙Bにある和歌は、「心ならずも離ればなれになってしまったことを嘆いて、あなたと一緒に（私もこの世から）消え果ててしまひましよう。」という意味であり、書き添えられている「遅るべうは」は「死に遅れるつもりは（ありません）」の意である。和歌にある「思はずも」は「思いがけずも」の意であり、「もろとも」は「一緒に」の意であるから、これらの表現が「心ならずも」③・意に反して④、「また」私も③・④と、正しく反映されている③・④に選択肢は絞られるが、④に書かれている「待っていてほしい」に相当する表現は手紙Bにはないので、手紙Bについて見ても、正解は③であることになる。

①は「離れてしまったことが苦しく」「この嘆きとともに消えてしまいたい」、②は「もはやあなたを愛することはできないが、前世からの因縁と

思えばつらく、⑤は「今逢えないことさえもどかしく」「魂の訪れなど待たずに」にそれぞれキズがある。手紙文の内容を表現に沿って読み、そこに書かれている表現が正しく反映されている選択肢に絞る一方、相当する表現がない余計な説明をしている選択肢を排除していけば、正解にたどり着くことができる。

正解 26 ③

問5 傍線部の心情説明の問題 標準

傍線部Y「かたがた方々思ひやるにも、悲しう見奉りぬ」とあるが、このときの右近の心情の説明として最も適当なものを選べ。

登場人物の心情は、その人物の会話部分に表れることが多い。ここでも右近の心情は、直前の右近の会話文、「かやうにこと少なく、節なきものから、いとどあはれにもいとほしうも御覽ぜむ」に表れている。「こと少なく」は「言葉少なく」、「いとどあはれにもいとほしうも御覽ぜむ」は「(男君は)ますますしみじみと気の毒にも御覧になるだろう」という意味であるから、これを説明している④が正解である。

①は「立场上、簡単な手紙しか書けない」が誤り。右近の会話文にその意味はない。ここで女君が短くしか手紙が書けないのは、苦悶のためであり、「立场上」のことではない。②は、「病のせいで言葉少ない男君の手紙」が誤り。見てわかるとおり、言葉少ないのは男君の手紙ではなく、女君の手紙である。よって、短い手紙を見て「気の毒」に思うのは「女君」ではなく、「男君」であるから、これも誤りである。③は「いよいよ落胆するだろうと、二人の別れを予感して」が誤り。右近の会話文にある「いとほしう」は「気の毒だ」の意で、「落胆する」の意ではない。「二人の別れを予感して」もない。⑤は「控えめな人柄がうかがえる」ととれる表現が本文にない。女君の手紙は「こと少なく」であると書かれているだけである。また、確かに男君と女君の関係がこの後改善しそうな様子はないが、右近が「二人の将来を危ぶんで」いるとまでは本文に書かれていない。

正解 27 ④

問6 内容説明の問題 応用

この文章の内容の説明として最も適当なものを選べ。

正解となる⑤は、29ページ1～3行目、「御消息取う出たれど、なかなか心憂く、そら恐ろしきに、『いかで、かくは言ふにかあらむ』とて、泣き給ひぬ。(『右近が男君の御手紙を取り出したけれど、(女君は)かえってつらく、何となく恐ろしいので、『どうして、このように言うのだろうか』とお思いになって、泣いてしまわれる。)」と、傍線部Xの直後の、「振り捨てやらで御覧ず(『男君の手紙を捨てることができるが、できずに御覧になる。』、さらに、Aの手紙文の後の、「書きすさみ給ふを御覧するに、来し方行く末みなかきくれて、御袖いたう濡らし給ふ。(『男君が思うままに手紙を書いていらっしやるのを御覧になると、女君はこれまでのことや行く末のことについて何もかも眼の前が真っ暗になって、涙でお袖をたいそう濡らしなさる。』)」に相当して誤りがない。「かき暮る」は、「空が暗くなる」の意を表す一方で、「眼の前が真っ暗になって悲しみに暮れる」の意を表す語であるから、選択肢にある「絶望的な気持ちになった」は「来し方行く末みなかきくれて」が表しているのである。

①は、「未練がましく言い寄っても女君が不快に思うのではないかと恐れて」が誤り。これは、本文4行目の、「『人わろく、今さらかかづらひ、をこなるものに思ひまどはれむか』と心置かれて」に相当しそうだが、傍線部Yから続いていることを踏まえると、この箇所は「『皇子が自分の子であることを明らかにすることで』みっともなく、今さら関わりあって、(女君の)心を乱し愚かな奴だと思われはしないだろうか」と自然と気がねされて」という意味である。前書きや、本文冒頭の「かたみに恋しう思し添ふことさまざまなれど」によれば、男君と女君は両思いなのであるから、男君が「女君を恋しく思う気持ち」を、女君が不快に感じるだろう」と考えそうにはない。

②は、「男君への手紙を右近に取り次がせようとした」が誤り。問3などでも見たように、女君は右近から男君の手紙を見せられても、つらく感じ、恐ろしがっており、「人目なき程に、あはれ、御返しを(『人が来ないうちに、さあ、御返事を』)」(29ページ13行目)と右近に促されて、短くBの返事を書いたのであり、女君の方からすすんで「手紙を右近に取り次がせよう」とはしていない。

③は、ほぼ全てが本文にない。清さだの手紙は28ページ最後の『』の部分であるが、ここは「本当に、(男君が)お悩みになり衰弱なさることは、日を経て言う甲斐もないほどひどく、拝見するのも気の毒で。東宮がたいそうかわいらしくまとわりつきなさるので、気を緩めて(部屋に)籠もりなさることもなかったのですが、この頃は、続けて参内なさることもおできにならず、ひたすら深くお悩みになり衰弱なさっている」という意味である。「右近から手紙が来ないことを不審に思」っている様子も、「帝が真相に気づいたのではないかと心配」にしている様子もなく、「事情を知らせるように」と書いているわけでもない。

④は、まず「東宮のもとに無理に出仕をしたため病気が重くなり」が誤り。③の解説で見たように清さだの手紙には、「東宮がたいそうかわいらしくまとわりつきなさるので、気を緩めて(部屋に)籠もりなさることもなかった」とはあるが、これが原因で病気が重くなったとは書かれていない。また、清さだの手紙から、男君が衰弱していることは女君に伝わっているに違いないが、「男は死ぬに違いない」と女君が思ったとは本文に書かれていないので、これも正しくない。

正解

28

⑤

第4問 漢文

程敏政『篁墩文集』

「書き下し文」

家に一老狸奴を蓄ふ。將に子を誕まんとす。一女童誤りて之に触れ、而して墮す。日夕鳴嗚然たり。会、兩小狸奴を餽る者有り。其の始め、蓋し漠然として相ひ能くせざるなり。老狸奴なる者、從ひて之を撫し、徬徨焉たり、躑躅焉たり。臥すれば則ち之を擁し、行けば則ち之を翊く。其の舐るに食を譲る。兩小狸奴なる者も、亦た久しくして相ひ忘るるなり。稍く之に即き、遂に其の乳を承く。是れより欣然として以て良に己の母なりと為す。老狸奴なる者も、亦た居然として以て良に己が出だすと為す。吁、亦た異なるかな。

昔、漢の明德馬后に子無し。顕宗他の人子を取り、命じて之を養はしめて曰はく、「人子何ぞ必ずしも親ら生まん（や）。但だ愛の至らざるを恨むのみ」と。后遂に心を尽くして撫育し、而して章帝も亦た恩性天至たり。母子の慈孝、始終織芥の間無し。狸奴の事、適に契ふ有り。然らば則ち世の人親と子と為りて、不慈不孝なる者有るは、豈に独り古人に愧づるのみならんや。亦た此の異類に愧づるのみ。

「通釈」

家に一匹の年老いた猫を飼っていた。(その猫が) 子を生みそうになった。(ところがその時) 一人の女の子が誤って子猫にさわって落として(死なせて) しまった。(親猫は) 一日中嘆き悲しんで鳴いていた。(その時) たまたま二匹の子猫を贈ってくれた人がいた。(子猫たちは) はじめのうちは無関心な様子で(老猫に) なつかなかった。老猫のほうは、(子猫たちの) そばに寄って行ってなでさすり、(まわりを) うろろしたり足踏みしたりして、落ち着かない様子であった。(老猫は、子猫たちが) 寝ると抱きかかえ、はなれるとついて行って守ったりした。子猫たちのうぶ毛をなめ、食べものを譲って与えた。二匹の子猫のほうもしばらくそうしているうちにへだてがなくなってきた。だんだん老猫になつくようになり、とうとう乳を受け入れ(て飲むようになった) た。それからは大喜びで(老猫にまわりついて) 実の母親のように思っ(ているようだった) た。老猫のほうもまたやすらかな様子で、(その二匹の子猫を) 自分が生んだ子のように思っ(ているようだった) た。ああ、なんとすばらしいことであるよ。

昔、漢の明德馬后には子供がなかった。(そこで) 顕宗は他の妃の子を引き取り、后に命じてその子の養育を託して言った、「子というものは、自分で産んだかどうかが大事なのではない。(育てるにあたっては) ただただ愛情をかけてやるのが大事なのだ」と。后はこうして心を尽くして(その子を) 慈しんで育て、(育てられた) 章帝もまた親に対する愛情が自ずとそなわって(る子供として成長した) た。母(の后) と子(の章帝) の慈しみと孝心は、終始わずかな隔りさえもなかった。あの猫のことは、ちょうどこのことにあてはまる。そうであるならば、世に親と子として生まれながら、(親として) 慈しみがなかったり、(子として) 不孝であったり(するように、互いに愛情を抱き合えなかったり) する者がいるのは、どうしてただ古人に恥じるだけ

であろうか（いや、それだけではない）。（それは）またこの（猫のような）動物にも（及ばないほどの）恥すべき者（といふべき）である。

【解説】

問1 語の意味の問題

- (1) 基礎 (2) 標準

傍線部(1)「承」・(2)「適」の意味として最も適当なものを、それぞれ選べ。

問1は、二〇一四年度に続いて、「語の意味の問題」であったが、「語」とは言っても、昨年度の「習」「尚」と同じく、漢字一字の意味の問題であった。

(1)「承」は、二匹の子猫が「稍やうやく之これに即つき（＝だんだんと老猫になつてきて）、遂つひに其その乳ちちを」という文脈にある。「承」の動詞としての訓みとしては、「うく」「つぐ」「うけたまはる」などがある。主語が子猫であるから、乳を①「授けた」、④「差し出した」では立場が逆になり、「承認・承知」などの熟語を思いうかべると、②「認識した」、③「納得した」を並べてあるのもわかるが、②・③ではどう考えても「其の乳を」に続かないであろう。正解は⑤「受け入れた」である。

(2)「適」は、「狸奴りどの事、契かなふ有り」という文の中にある。「契」を「かなフ」と読んでいるが、これはふつうに「かなフ」と訓よみする字ではなく、字義（約束する。刻む）を考へても意味をあてはめにくいので、なかなか難しい。ただ、「かなう」は、「ちようどよく合う。あてはまる。思うようになる。匹敵する」ということであるから、あの老猫と実子でない子猫のことは、明徳馬后と実子でない章帝のことと「まったく同じようで、あてはまる」という意味になるものと考えられる。とすると、「適」は、③の「ちようど」が最も適当であろう。

「適」は、「ゆク（＝行・往・之・如・逝・徂・征・于など）」か、「たまたま（＝偶・会など）」と読む場合に質問されやすいが、「まさ二（＝方・正など）」と読んで、「まさしく。ちようど」とか、「たつた今」の意で用いることがあり、この知識があれば一発で答が出たことになるが、「まさ二」の知識は、やや厳しいレベルであろう。

- 正解 (1) 29 ⑤ (2) 30 ③

問2 漢字の読み方（同じ読み方の字を選ぶ）の問題 (ア) 基礎 (イ) 基礎

二重傍線部(ア)「将」・(イ)「自」と同じ読み方をするものを、それぞれ選べ。

「漢字の読み方の問題」は、二〇〇四年度から二〇〇八年度まで五年間続けて出題されたが、同じ読み方をする字を選択肢から選ぶという形は初めてである。形としては新傾向であるが、(ア)「将」、(イ)「自」いずれも簡単なレベルである。

(ア)「将」は、「(老狸奴) 将に子を誕まんとす」で、もちろん、再読文字「まさニ…ントす」である。

選択肢もすべて再読文字で、①「当」は「まさニ…ベシ」、②「蓋」は「なんゾ…ざル」、③「応」は「まさニ…ベシ」、④「且」が「将」と同じで、「まさニ…ントす」、⑤「須」は「すべカラク…ベシ」である。正解は④。

(イ)「自」は「是れより」の「より」。同じ読み方をするのは④「従」である。

①「如」は返読する場合は「ごとシ」、そのほか、「もシ。ゆく」。②「以」は返読して「…ヲもツテ」。③「毎」は「つねニ」、返読するときは、「〜ごとニ」。⑤「雖」は返読して「〜トいへども」である。

正解 (ア) 31 ④ (イ) 32 ④

問3 語の用法（読み方と意味）の説明問題 基礎

波線部(a)「矣」・(b)「也」・(c)「耳」・(d)「焉」・(e)「已」の説明の組合せとして最も適当なものを選べ。

文末の助字「矣・也・耳・焉・已」の用法を問うという、今までにない形の新傾向の問題であるが、要は字の読み方(あるいは読まないこと)と意味(用いられ方)を問うているのであるから、知識力の問題で、問1から問3までこのような知識を問うタイプの問題が出題されたことは珍しいことである。

(a)「矣」は、冒頭の「将に子を誕まんとす」の後にあるが、これは、読まない置き字である。①・②のように、詠嘆の「かな(夫・哉・与など)」と読むこともあるが、この位置では「かな」ではない。①・②は×である。

(b)「也」は、①にあるように、文末で断定の「なり」と読むことが多いが、③のように「伝聞」の「なり」にはならない。ただ、この位置では、「老狸奴なる者も、亦た居然として以て良に己が出だすと為す」の後に「也」があるのであるが、直前の対句、「欣然として以て良に己の母と為す」

す」の後は「也」がないことを考えると、「なり」と読めないこともないが、「矣・焉」などと同じ用法の読まない置き字と扱うほうがよいのではないかとと思われる。いずれにせよ、③は×。

(c)「耳」は、「但だ」と呼応しているので、当然、限定の「のみ(＝已・爾・而已・而已矣など)」である。

(d)「焉」は、「適に契ふ有り」と言い切った後にあるので、(a)の「矣」と同じく、読まない置き字で、断言(断定)・強調の意を表す。④は○であるが、「意志」を表したりはしないので、⑤は×。また、「焉」は、文頭では、疑問詞「いづクンゾ(＝安・寧・悪・烏)」としても用い、「これ(之・此・是・諸)」と読むこともある。

(e)「已」は、②・⑤にあるように、文末で「のみ」と読むことがある。「亦た此の異類に愧づるのみ」の位置も、読み方は「のみ」であるが、「限定(ただ…だけだ)」というよりは、「断定・強調(…なのだ)」と考えるべきであろう。②・⑤は△である。

よって、(c)「耳」と(d)「焉」の両方の説明が合っている④が正解になる。

正解 33 ④

問4 傍線部の理由説明の問題 標準

傍線部A「吁、亦異哉」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを選べ。

傍線部、「吁、亦た異なるかな」の「異」は、実の親子でない老猫と子猫がなつたということに対する感想であるから、「珍しい」「ふしぎだ」「並みなことではない」のどの意味合いにとるにしてもプラス評価ではあり、「ああ、なんとすばらしい(ふしぎな)ことであるよ」のような意味である。後半(第二段落)の、明德馬后と章帝のことと照合しても、老猫の子猫にかけた愛情に評価のポイントはある。

さて、選択肢をながめて見ると、文中の、「嗚嗚然」「漠然」「欣然」「居然」の四語が判断のキーワードになっていることがわかる。実は、この四語の主体が、「老猫」か「子猫たち」かを見ると、答は出るのである。

「嗚嗚然たり」だったのは、産んだ子猫を亡くした「老猫」であるが、①のように「子猫たちと出会った時」に「嗚嗚然」だったのではないから、①は×。

「漠然として相ひ能くせず」だったのは、二匹の「子猫たち」である。「互いに」と言えないこともないので、②の前半は微妙に見えるが、互いに「親子であることを忘れていた」のではない(実の親子ではない)から、②はキズがあり、×。

問5 傍線部の解釈の問題

標準

正解 34 ③

「欣然として以て良に己の母なりと為」したのは当然「子猫たち」であるから、この点でも①の後半は×。「居然として以て良に己が出だすと為」したのは「老猫」であるから、④の前半は×。「互いに」ではないので、②の後半も×。⑤は「居然」たるさまを装いながらも深い悲しみを隠しきれずにいる」にキズがあるので×。

よって、「漠然」＝「子猫たち」、「欣然」＝「子猫たち」になっていて、説明にキズのない③が正解である。

傍線部 B 「人子何必親生」の解釈として最も適当なものを選べ。

「人子」は、直前にも「他の人子を取り」と、ふりがなつきの用例があるから、「じんし」でよいであろう。選択肢はすべて「子というものは」と共通しているので、ここは判断の材料にならない。

「何必…」は、「なんゾかならずシモ…ン」という形の反語形。

「親」は、「おや」ではなく、「みづカラ」と読む副詞として用いている。ここを「親元」としている①、「親の…」としている②・⑤は間違いである。

「生」は、「うム」(マ行四段活用)。「育てる」のではないから③も間違いである。

傍線部は、「人子何ぞ必ずしも親ら生まん(や)」と読むことになり、直訳すれば、「人の子というものは、どうしても必ずしも自分で産むこと(必要)があるか、いや必ずしも自分で産むこと(必要)はない」ようになる。

正解は④。

顕宗が、実子のない明德馬后に、「他の人子を取り、命じて之を養はしめ」ようとして言った言葉の中であるから、話の流れにあてはめても、④で適切である。

①・②・③・⑤は、いずれも文脈にもあてはまらない。

正解 35 ④

問6 返り点がついている傍線部の書き下し文の問題 標準

傍線部C「世之為人親与子、而有不慈不孝者、豈独愧于古人」の書き下し文として最も適当なものを選び。

返り点がついている傍線部の書き下し文の問題である。返り点も省いて、返り点の付け方と書き下し文（読み方）の組合せの正しいものを選ぶという形が、例年多いが、その場合でも、大事なのは書き下し文であり、傍線部中に何か句法上のポイントがないかを考えたい。

長い傍線部は、三つの部分に分けられるが、まん中の「而有不慈不孝者」は、選択肢がすべて「不慈不孝なる者有るは」と共通している。「世之為人親与子」には選択肢に配分がないが、「与」は、②のように「与ふ」とか、③のように「与ふる」のように読むのではないであろう。「A与B（AとBと）」の「と」と読む形であろうと思われる。

「豈独愧于古人」には、「豈に独り…のみならんや」と読む、累加形のポイントがある。「豈唯…（豈に唯だに…のみならんや）」「何独…（何ぞ独り…のみならんや）」でも同じで、「どうしてただ…なだけであろうか（いや…なだけでなく）、その上…だ」のような意味になる。この部分には、また、①・③・④「豈に独り古人のみを愧づかしめんや」と、②・⑤の「豈に独り古人に愧づるのみならんや」の、3対2の配分があるが、ここは、②・⑤が正しい。

②か⑤か、となれば、②の冒頭の「世の人親の子に与ふと為すも（＝この世の人の親が子に与えんとするもの）」では、やはり「与ふ」と読むことによって文意が通らなくなっている。

⑤は、「この世の親と子となって、（親として）慈しみがなかったり、（子として）不孝であったりする者がいるのは、どうしてただ古人に恥じるだけであろうか（いやそれだけではない）」となるので、文意が通る。

正解 ⑤

36

問7 本文全体の趣旨（筆者の考え方）の説明問題 応用

この文章全体から読み取れる筆者の考えの説明として最も適当なものを選び。

「筆者の言いたいこと」は本文の最後にあることが多い。

傍線部Cに累加形があったのであるが、「どうしてただ…なだけであろうか、いや…なだけでなく、その上に…だ」の、「その上…だ」にあたるのが、

傍線部Cの後の、最後の一文、「亦た此の異類に愧づるのみ」である。

「異類」は、人間ではない「鬼神」や「鳥獸」のことで、ここでは「此の異類」であるから、猫のことである。

つまり、「この世に生まれて親子となって、親として子を慈しまなかつたり、子として親不孝であつたりする者がいるのは、(明德馬后と章帝の例のような) 古人に恥じるだけでなく、(あの猫の親子のような) 動物にも恥じるべきだ」ということを言いたいのである。

正解は②。

- ①は、前半の「猫」についても、後半の「人間」についても、大きく本文の内容と異なっている。
- ③は、「老猫の悲しみは癒やされることはなかつた」、「古人が示したように」以降、やはり、ほぼ全体が間違っている。
- ④は、「その一方で」以降の内容が間違いである。
- ⑤は、子猫が「孝心を抱く」としている点、後半の「成長しても肉親の愛情に恩義を感じない子がいることは」が間違いである。

正解

37

②